開館一周年記念特別展

芭蕉・旅・甲州

目次

ごあいさつ

展示資料解説

谷村城下絵図

芭蕉へのプロローグ

破笠筆芭蕉画像……2

芭蕉翁記念館本『埋木』……4

芭蕉模本『蘭太暦』……6

遺言状……8

『枯尾華』……10

『芭蕉行状記』……12

『俳諧百一集』……14

旅と天和・貞享時代

「馬に寝て」句文……18

万菊丸いびきの図……20

『武蔵曲』……22

『みなし栗』……24

「元日や」発句短冊……26

「山里いやよ」等付句切……28

「芭蕉野分」発句切……30

「我富り」発句短冊……32

蘗塒そして芭蕉との交流

柳梢の「廻りけり」発句短冊……36

十二月十九日付幻世書簡……38

「月十四日」真蹟懐紙……40

芭蕉俳諧古巻……42

その後の波紋

『松の宴』……48

『こまづか集』……50

『真すみの鏡』……52

『氷面鏡九十四人集』……54

『みつわぐみ』……56

資料紹介

こまづか集……60

氷面鏡九十四人集……74

特別寄稿

芭蕉と蘗塒……102

芭蕉蘗塒対照略年譜

破笠筆　芭蕉画像

破笠筆　芭蕉画像（芭蕉翁記念館蔵）　一幅

今日伝存する江戸時代に製作された芭蕉の画像は、数多い。中でも、芭蕉生前の姿を知る門人杉風・許六・破笠が描いた画像は、特に注目されている。

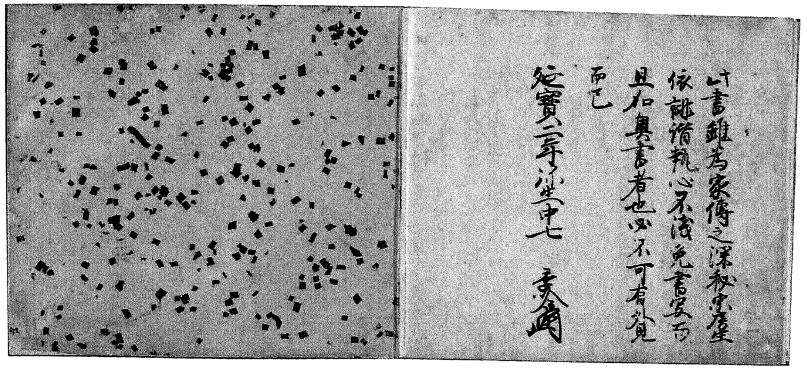
破笠は、小川氏。通称、平助。別号、卯観子・笠翁・宗羽・宗于など。俳諧は、初め露言門、のち蕉門。細工師・絵師でもあり、蒔絵や象嵌では破笠細工と呼ばれ、世に知られた。寛文三（一六六三）年生、延享四（一七四七）年六月三日没（『蒔絵師伝』）、享年八十五歳。

栢筵（二代目市川団十郎）の『老のたのしみ』享保二十年二月八日の条に、破笠が芭蕉について語ったエピソードがある。

此朝、笠翁殿見へ、しばらく芭蕉翁の庵室の物語。桃青深川のはせを庵、へつゐ二つ有りて、台所のはしらにふくべかけて有。二升四合程も入べき米入也。杉風・千鱗弟子の見次にて米なくなれば、又入て有。もし、弟子よりの米間違ておそき時、ふくべ明けば、自らもとめにも出られし歟。其頃、笠翁子は二十三歟、二十四の時のよし。翁は六十有余の老人と見へしよし。其頃、翁は四十前後の人歟。

かつて親炙していた芭蕉の様子を、よく伝える逸話である。破笠の俳諧活動に関しては、楠元六男「享保期俳壇の周縁――小川破笠ノート」（『享保期江戸俳諧攷』）がある。

破笠の描いた芭蕉図は相当に多いが、ともに茶人・利休像を彷彿とさせる雰囲気がある。破笠の芭蕉崇拝の意識をよく示している。この点に関しては、石川真弘「芭蕉の風貌」（『日本古書通信』60巻10～11号）参照。



此書雖為家傳之深秘宗房生
依誹諧執心不浅免書写而
且加奥書者也必不可有外見
而已
延寳二年弥生中七　季吟

埋　木

『埋木』（芭蕉翁記念館蔵）写本　桝形本一冊

寛文二十一（一六四四）年、伊賀国上野赤坂（現在の三重県上野市赤坂町）の郷士の家に生まれた芭蕉は、十代の末に五千石の藤堂新七郎良精の嫡子良忠（俳号、蝉吟）に出仕して、当時流行の貞門俳諧に親しみ、寛文六（一六六六）年蝉吟と死別する。以後、伊賀に住して俳諧の修行を経て、江戸に下る。

東下の時期に関しては、寛文十二（一六七二）年説や延宝三（一六七五）年説等が錯綜しているのが現状である。ここでは、俳諧師として立つべく寛文十二年に東下したものの、うまく江戸俳壇で泳ぎわたることができず、季吟からの伝授を必要とした、との解釈を採用しておく。芭蕉としてみれば、蝉吟の師・北村季吟からしか、伝授は受けられなかったと理解しておきたい。

本書奥書によって、伝授の経緯を示しておく。

此書雖為家伝之深秘宗房生
依誹諧執心不浅免書写而
且加奥書者也必不可有外見
而已
延宝二年弥生中七　季吟

（釈文）

この書、家伝の深秘と為す雖も、宗房（芭蕉が藤堂家に仕えていた頃の名乗り）生、誹諧執心浅からざるに依りて、書写を免じて且つ奥書を加うる者なり。必ず外見有るべからざる而已。

延宝二年（一六七四）年弥生（三月）中七（十七日）　季吟

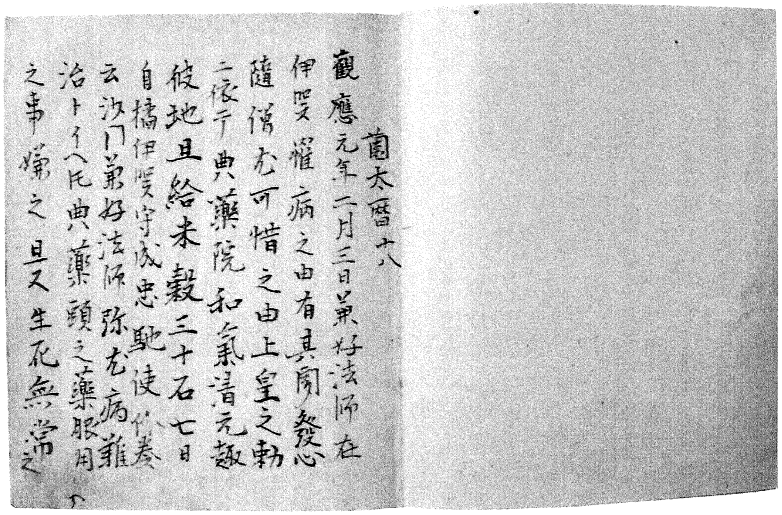
この伝授書『埋木』は、尾形仂によって紹介された。後、小高敏郎の批判があるも、明確な決着はみていない。近年、榎坂浩尚の『北村季吟論考』（新典社、平8）に「『誹諧埋木』について」が収められ、「延宝二年如月中六」の奥を持つ『埋木』の存在も紹介されている。

また、『埋木』の刊本には、次の記事がみえる。

延宝元癸丑年仲冬吉日
京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛
宇兵衛
開　板

すでに延宝元年に、本書は京の井筒屋から出版されていた。

刊本があるにもかかわらず、伝授がなされていく不可思議な状況については、季吟側の論理から「金銭的報酬を意味するもの、己の地盤の拡張を意味するもの」（榎坂）との把握が可能になる。対してそれを受ける側の論理は、どうだったのか。「季吟の花押なり印なりが、未だ厳かな権威をもち、その授与をもって無上の光栄と考えてい」（榎坂）たことが想定できる。当時の芭蕉も、そうした人間の一人なのであった。



園太暦

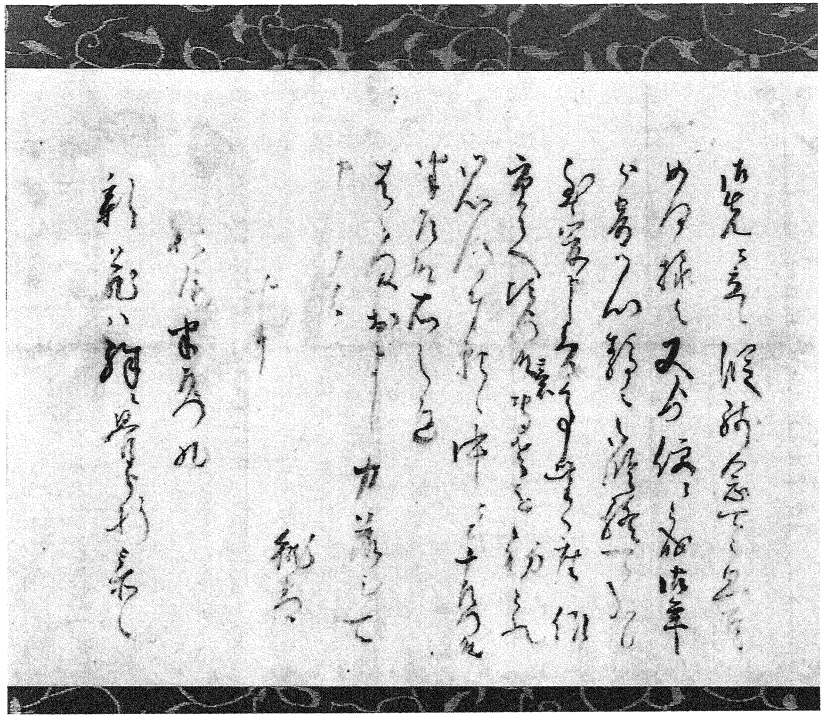
『園太暦』

（芭蕉翁記念館蔵）　写本　枡形本一冊

『園太暦』は、南北朝時代の太政大臣・洞院（中園）公賢の日記である。当時の各界の動向を報ずる貴重な歴史資料。他に「中園太相国暦記」「園太記」「園太暦記」の名もある。基本的に政治・社会史料となるものであるが、他方では歌壇史研究資料としても貴重。二条為定や冷泉為秀・頓阿・兼好法師らの動静が、折にふれて記されているからである。

今回展示する『園太暦』は、この公賢の日記から、『徒然草』で有名な兼好法師に関わる記事だけを、「抜書」したスタイルの一本である。兼好法師の隠者的行状を日録風に書き綴ったもので、伊賀における兼好隠棲説を報ずるところに特徴がある。しかし兼好にそのような事跡なく、『園太暦』に仮託せられた偽書であることはすでに証明済みである。

ではなぜこの偽書が、意義をもつのか。近世人の兼好理解を窺うに貴重であるとともに、それ以上に重要なのは芭蕉の筆写によるからである。芭蕉がこの偽書の『園太暦』を参考にして、もろもろの文学活動を展開させていたことについては、川平敏文の「兼好伝と芭蕉」（『近世文芸』65）に詳しい。その痕跡は、『更科紀行』や『笈の小文』、さらには芭蕉の発句に窺える。なお、資料紹介も川平の手により「連歌俳諧研究」（93）になされている。この『園太暦』が、芭蕉の模本として重要なことは、すでに芭蕉翁記念館の『館蔵遺墨にみる芭蕉翁』（昭61）に指摘されているが、いかにも芭蕉の筆癖を伝えるものといえる。



遺言状

芭蕉筆遺言状　（芭蕉翁記念館蔵）　一通

御先に立候段、残念可被思召候。
如何様共、又右衛門便に被成、御年
被寄、御心静に御臨終可被成候。
至爰申上る事無御座候。
市兵へ、次右衛門殿、意専老を初、不（残）
御心得奉頼候。中にも十左衛門殿、
半左殿、右之通。
はゝさま・およし、力落し可
申候。以上

桃青

十月

松尾半左衛門様

新蔵は殊に骨被折、忝候。

（釈文）

御先に立ち候段、残念に思し召めさるべく候。如何様とも又右衛門便りに成され、御年寄られ、御心静かに御臨終成さるべく候。爰に至って申し上る事、ご座なく候。市兵へ・次右衛門殿・意専老を初め、不（残）御心得頼み奉り候。中にも、十左衛門殿・半左殿、右の通り。ばゝさま・およし、力落し申すべく候。以上

桃青

十月

松尾半左衛門様

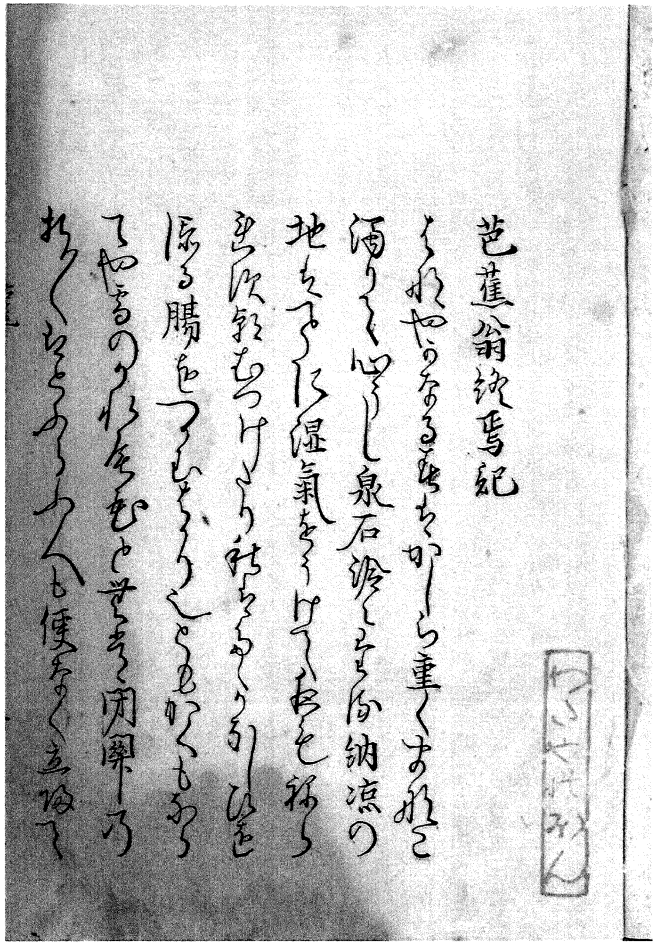
新蔵は殊に骨折られ、忝なく候。

『笈日記』によると、元禄七年十月十日、病状が急変し、芭蕉は覚悟して遺書三通を支考に口述筆記させ、自ら筆を執って兄半左衛門宛のこの一通を認めたという。死を二日後に控えた芭蕉最後の筆跡である。意専の「意」を後から右脇に書き加えたり、「不残」の「残」を書き落としたりしているところに、乱れがみえる。衰弱した体に鞭打ち、渾身の力をふるって書いた、兄への遺書である。

文中、「又右衛門」は兄の子。「ばゝさま」は兄の老妻か。「およし」は芭蕉の末妹。

さらに「市兵へ」は卓袋、「次右衛門」は台蘇、「意専」は猿雖、「十左衛門」は半残、「半左」は土芳、「新蔵」は望翠で、いずれも伊賀蕉門の人々。

兄の松尾半左衛門に対して、息子・又右衛門を頼りにして、ともかくも心静かに人生をまっとうしてください、と述べている。その後に、この段階になっては、もう何も申し上げることはないと言う。渾身の遺書であったろうが、短いこの一通に、言葉をつくせぬ万感の思いが込められている。



枯尾華

『枯尾華』

（天理大学附属天理図書館蔵）　版本　半紙本二冊

俳諧追善集。其角編。元禄七（一六九四）年十二月、京都井筒屋庄兵衛刊。江戸の古参の門弟・其角が編集した、芭蕉の追善集。

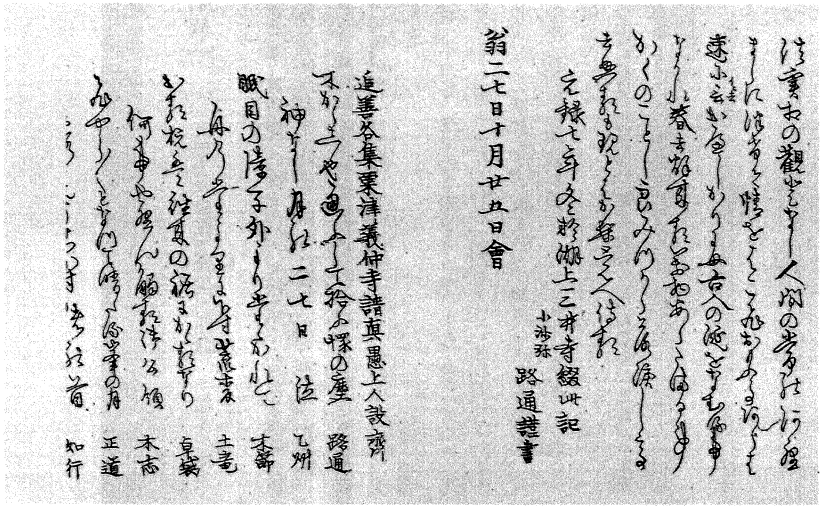
上巻には、其角による「芭蕉翁終焉記」を載せる。常に芭蕉の側にいた、其角が記した芭蕉一生の概略である。その中に、次の記事もみえる。

天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり、苫をかづきて、煙のうちに生のびけん。是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の変を悟り、無所住の心を発して、其次の年、夏の半に甲斐が根にくらして富士の雪のみつれなければ云々

深川の草庵が被災したのは、本来天和二年のことであるが、年次の誤解はあるものの、芭蕉が甲斐の国に赴いたことを報じる貴重な証言もある。

他に、元禄七年十月十八日興行の其角の「なきがらを笠に隠すや枯尾華」の句を立句とした近江国大津・膳所・京都・摂津国・伊賀国の連衆四十三人による百韻一巻、諸家の初七日から四十七日までの追悼発句百十六章を収める。

下巻には江戸から急遽義仲寺（ぎちゅうじ）にかけつけた嵐雪の霜月七日追悼文、十月二十二日夜嵐雪・氷花ら歌仙。十月二十二日桃隣・子珊・杉風・曽良・野坡ら歌仙。十月二十三日湖春・素龍・露沾・素堂ら歌仙。十月二十三日晋子亭興行仙花・沾徳ら歌仙。すべて江戸で巻いた計四巻。江戸から上洛した嵐雪・桃隣を迎え、在京の其角も加えて上方門人の十一月十二日初月忌丸山量阿弥亭興行百韻一巻・追加、於義仲寺六七日の惟然ほか湖南門人興行歌仙。その他知己門人よりの多数の悼句を載せる。中に、季吟・露沾の句や、原安適の挽歌などがある。



芭蕉行状記

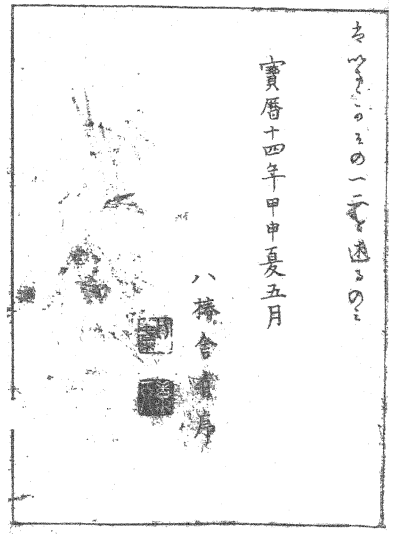
『芭蕉行状記』（個人蔵）版本　半紙本一冊

芭蕉の門弟・路通が編んだ、芭蕉の追善集。元禄八年本は「芭蕉翁行状記」。巻頭に「行状記」と題した芭蕉の一代記を載せるが、特に元禄七年五月に始まる芭蕉最後の旅の記事が詳しく、義仲寺の葬儀にまで及ぶ。また芭蕉の晩年に、路通は師と疎遠になっていたわけだが、不義理を許されて門人たちへの遺言にも、「路通が怠り努々（ゆめゆめ）うらみなし、かならずしたしみ給へ」とあることも報じられている。

以下、二七日忌以降七七日忌に至る追善会に寄せられた諸家の発句・連句を収め、末尾に「右一巻於粟津義仲寺校考之」とある。

芭蕉の追善集としては、其角の『枯尾華』、支考の『笈日記』とともに、本『芭蕉翁行状記』は並び称されるものである。なお、今回の展示においては、硯田舎紀逸（きいつ）の序文をそなえる、後印本を使用してある。

開いてある部分の中央には、「翁二七日十月二十五日會」の文字がみえる。以下、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日（四十九日）と追善会は重ねられた。



俳諧百一集

『俳諧百一集』（個人蔵）版本　大本一冊

近世中期の八椿舎康工が編集した、諸俳人の肖像画と句及び短評を記した集。書名は、「俳諧百人一句集」を省略したもの。表紙は薄朽葉色で、原題簽（だいせん）を残す。宝暦十四（一七六四）年自序で、明和二（一七六五）年四月刊。取りあげる俳人は、芭蕉を巻頭に、康工の師・麦林（乙由）を巻軸に据える。貞門から江戸中期に至る百人の有名俳人を掲げる。絵は康工自身が筆をとり、評も簡にして要を得ている。

編者の康工は、越中戸出の人で、麦林・希因門の俳人。よって、選択する俳人の傾向は、当然のこと、美濃・麦林系に偏向する。

本書に関しては、石川了の「康工編『俳諧百一集』の板木について」（「大妻女子大学紀要―文系―」27号）がそなわっている。大妻女子大学蔵の板木を検討することにより、入木箇所を明示。そして、初印本と後印本とを明らかにしている。石川の調査に従えば、展示本は初印本。

開いてある芭蕉の姿絵の条には、「古池や蛙飛こむ水の音」が記してある。短評部分には「いかなる意味や有けん。吟じてなみだを流し、唱てさびしみ自然とあらはる。中々申までもなし。凡慮の及ぶ所にあらず、玄々妙々にして独歩也。信ずべし、仰べし。」とある。また、康工の記す芭蕉の姿絵には、構図の上からは破笠筆の芭蕉絵の影響を観察すべきか。顔の様子からは、杉風筆の姿絵の影響等を感じ取ることもできる。